

令和 6 年 5 月 9 日現在

機関番号：32631

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K01207

研究課題名（和文）ケニア人女性の越境と母国開発をめぐる人類学的研究

研究課題名（英文）Anthropological study of national development and transnational Kenyan women.

研究代表者

石井 洋子（ISHII, YOKO）

聖心女子大学・現代教養学部・教授

研究者番号：30431969

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、米国およびケニアでの長期滞在型調査の研究成果をベースにして、2000年以降に急増したギクユ人移民女性の実態と母国との関わりを明らかにした。従属的に捉えられていた女性移民が、実は多様な支援をたくり寄せてアメリカ生活を開始し、男性よりも早く稼ぎ始めて自立し、ニッチ産業へ参入し、戦略的・互恵的に生活する実態を明らかにした。彼女たち多くは医療従事者であり、実家や母国へ多額の送金を行っていた。母国の孤児院や教会、奨学支援を行うなど、母国との厚い関わりがあった。女性移民を遠隔的に支えるのは、携帯電話で繋がる友人や故郷の家族であるが、新天地で女性移民が紡ぐネットワークは多元的であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

カースルズ(2014:16)らは、近年の国際移動の特徴を「移民の女性化」と称し、看護師や家事労働者といった女性の国際労働者の増加を指摘した。しかし、本研究で注目した在米ケニア人女性移民は、男性出稼ぎ者の帯同家族として軽視され、実態が見えない状態であった。実際、米国大学の留学生や男性移民の家族として渡米する女性が急増し、筆者が出会ったケニア人女性看護師の多くは米国で専門的な知識を得て移住先に住み続ける頭脳流出の状態にあった。グローバル化の時代が深化し、外国技術との連結をさらに求められるケニア社会の牽引者として女性移民に注目することは、アフリカ研究の新しい視点として重要である。

研究成果の概要（英文）：Based on the research findings of a long-term residential study in the U.S. and Kenya, this study clarified the realities of Gikuyu immigrant women and their relationship with their home countries, which have increased rapidly since 2000. The study revealed that female immigrants, who had been perceived as subordinate, actually started their lives in the U.S. by seeking diverse supports, started earning earlier than men, became independent, entered niche industries, and lived strategically and mutually beneficial lives. Many of these women were health care workers and sent large remittances to their parents' homes and home countries. They had strong ties to their home countries, including orphanages, churches, and scholarship support. Although the women migrants were remotely supported by friends and family back home who were connected by cell phone, the networks spun by the women migrants in the new country were multidimensional.

研究分野：文化人類学

キーワード：移動・越境 ケニア ギクユ人女性 頭脳流出 米国

1. 研究開始当初の背景

(1) 2010~2019年の9年間で、在米ケニア人の数は246パーセントへと急増し(図1)、2020年の在米ケニア人は15万7千人となった(MPI オンライン)。その約半数は女性であるが、女性移民の実態は明らかにされていなかった。



(出所) US Census Bureau, various years および Gibson & Jung (2006)をもとに筆者作成

(2) 在米インド人看護師を研究したジョージ(2011)によると、米国で看護師として自立した経験は母国および移住

地でのジェンダーや社会経済的な関係をも覆す出来事であったという。在米ケニア人女性もまた、病院や老人ホーム、個人宅で働く医療従事者/ケアワーカーなどとして家計を支えていたため、男性優位な母国の価値観、米国での夫婦関係に何らかの影響を及ぼすであろう事が想像できたが、研究報告は存在しなかった。そのため、ケニア人女性の移住先での生活について知る事は、移民と母国の関係や、移民を押し出す母国のあり方を理解する上でも重要であった。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、アメリカ・メリーランド州の都市ボルチモアおよびケニアでの現地調査を通じて、頭脳流出に悩むケニアの社会的発展のあり方を見据え、2000年以降に急増した在米ケニア人女性の実態と母国との関わりを明らかにすることである。本研究ではとくに、筆者が90年代半ばから調査を続けているケニア最大人口のギクユ人(*Gikuyu*)に注目した。

(2) 30年来、ケニア現地調査を続ける中で、出移民の急増と軌を一にしてナイロビ周辺の町並みが大きく変化した様子を目撃した。夫方居住を行うギクユ人農村において、女性移民が実家の両親のために多額の送金をし、立派な家を建てるのは珍しい現象であった。本研究は、海外で力を蓄える女性たちが持つ潜在的な力に注目し、世界経済の流れにおいて過小評価された女性移民が母国へ貢献する可能性をグローバル社会・経済への影響力の中で捉える事を大目標とした。

3. 研究の方法

(1) 本研究は、急増する在米ギクユ人女性移民の生活実態や母国への思い・実践を探る。そのため、これまでに実施した在米ギクユ人移民の男性世帯主を中心とした聞き取り・参与観察による成果を発展させ、女性移民に関する追加調査を実施した。

(2) 新型コロナウイルス蔓延のため、実際の現地調査は研究期間中に1回しか行えなかったが、オンライン・インタビューを実施し、フェイスブックやメール等で情報交換を頻繁に行なった。オンラインでギクユ人移民の語りを録画・編集し、zoom ウェビナーにて動画を共有した。日本国内やインターネット上での文献調査、資料調査を進め、ケニア・ムランガ県の調査村(移民の母村)およびオンライン上で研究成果の発表とディスカッションを行なった。

4. 研究成果

本研究では、これまでの成果「ケニア人の海外渡航史の整理」「在米ギクユ人の社会経済的特徴」「居住状況」「メリーランド州での世帯調査結果」「母国への恩返しブームの内容」を踏まえ

て、注目したギクユ人女性移民について、以下の研究成果を得た。

(1) 女性の移住体験：ケニア人移民は男性中心であったが、2000年以降、女性移民の入国が男性を上回る年もあり、ボルチモアのケニア人移民の男女比率は同等となった。先駆者の男性に比べて、女性移民の移住体験は多くのアドバイスを得て苦労は少なかったと述べた人が多かった。しかしカルチャーショックは男女問わず大きかったようである。

(2) 渡米する娘への期待：1990年代から米国大学へ留学するケニア人男性が増えたが、母国の両親の期待を裏切り、大学中退やアルコール中毒、送金打ち切りなどの事例が増えた。一方で娘は真面目に米国大学で学位を取得し、給料の一部を定期的に送金する事がわかり、娘を渡米させたい親が増えた。実際、女性移民の44パーセントが大学・大学院の学歴を有しており(2015-16年調査)、アメリカ人全体の同数値が31パーセント(MPI 2015)である事からも、女性移民の学歴が高いことが分かった。

(3) 医療従事者としての女性移民：筆者が米国で出会った6割以上のギクユ人女性が医療従事者であった。メリーランド州の病院は就職の際に法的地位を厳しく調査せず(当時)、看護師としての需要や給料、社会的地位が高く、働く時間を調整して子どもの面倒も見られて、移民でも黒人でも問題なく就職できると、先駆者からのアドバイスを受けたという。長時間労働でいつも疲弊していたが、ヘルパーや看護助手からスタートし、資格を得て看護師、診療看護師になる女性もおり、学び続けて人間的に成長したいと述べた人もいた。

(4) 女性移民による母国への貢献：2021年の1年間のケニアへの送金額は37億ドル(4300億円程度)であり、その6割以上が米国からであった(図2)。筆者が調査した女性移民の多くは40才代前後の働き盛りであり、定期的に母国へ送金していた。両親の生活費、家改築資金、キョウダイの教育資金、移民家族が母国へ帰還後に暮らす家の建築費などに当てていた。母国の孤児院や母国にいる実母が通う教会への寄付などもあった。

(5) 女性移民の社会関係：新天地の女性移民は相互的ネットワークを張り巡らせ、アメリカ生活の高ストレスを解消していた。故郷の伝統的な女性の集まりは、未婚女性やシングルマザーなどが社会的低位に置かれたが、移住先ではスティグマを廃した、あらゆる女性に親和的な特徴を有していた。

以上、ケニア共和国からの女性移民に注目した本研究を通じて、母国社会に与えるポジティブな影響力が見えた。

引用文献：

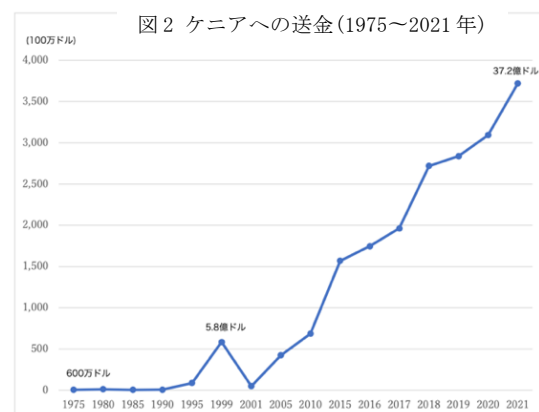
シバ・マリヤム ジョージ (2011) 『女が先に移り住むとき：在米インド人看護師のトランスナショナルな生活世界』 有信堂

Central Bank of Kenya “Diaspora Remittances” <https://www.centralbank.go.ke/diaspora-remittances/> (2024年5月8日最終アクセス)

Gibson, Campbell and Kay Jung (2006) “Historical Census Statistics on the Foreign-Born Population of the United States:1850-2000.” Population Division Working Paper No. 81. U. S. Census Bureau.

MPI オンライン “Immigrant and Emigrant Populations by Country of Origin and Destination” (2024年5月8日最終アクセス)

MPI (Migration Policy Institute) (2015) “The Kenyan Diaspora in the United States.”



出所：World Bank “Migration and Remittances Data”, Central Bank of Kenya “Diaspora Remittances” より

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 石井洋子	4. 巻 31(1)
2. 論文標題 「移民力」を發揮する	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国際開発研究	6. 最初と最後の頁 pp.5-18.
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32204/jids.31.1_5	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 石井洋子	4. 巻 173
2. 論文標題 米国に暮らすケニア人移民の生活実践（1） ニッチな場面で賢く働く	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 季刊民族学	6. 最初と最後の頁 84-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 石井洋子	4. 巻 174
2. 論文標題 米国に暮らすケニア人移民の生活実践（2） 大陸を超えて密に支える	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 季刊民族学	6. 最初と最後の頁 70-79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 石井洋子	4. 巻 641
2. 論文標題 アメリカ合衆国東部への国際移動と生存戦略 ケニア出身の女性移民の語りに注目して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 研究双書 アフリカ女性の国際移動	6. 最初と最後の頁 pp.83-123.
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 石井洋子	4. 巻 38(4)
2. 論文標題 208の国と地域がわかる国際理解地図D00Rドア アフリカ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 地図情報	6. 最初と最後の頁 148
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 石井洋子
2. 発表標題 在外ケニア人が出身国へもたらすインパクト：アメリカ・メリーランド州のケニア人移民での人類学的調査をもとに
3. 学会等名 国際開発学会第32回研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 石井洋子
2. 発表標題 移民として生きる：国境を越えるケニア・ギクユ人移民の日常世界と母国との関係
3. 学会等名 国際開発学会 Zoom webinar (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 石井洋子
2. 発表標題 “A Preliminary Study to Identify how African Students experience Religious Belief and Belonging while in Japanese Colleges.”
3. 学会等名 日本アフラシア学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 YOKO ISHII
2. 発表標題 Comment on “ A Preliminary Study to Identify how African Students experience Religious Belief and Belonging while in Japanese Colleges. ”
3. 学会等名 日本アフラシア学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 石井洋子
2. 発表標題 ケニア人女性移民の越境と母国へのインパクト~米国およびケニアにおける人類学的調査より
3. 学会等名 国際開発学会 & 人間の安全保障学会 共催大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>聖心女子大学 教育研究業績書 https://www.u-sacred-heart.ac.jp/report-x850d/procs/showprocp.php?pid=15036 聖心Voices https://www.u-sacred-heart.ac.jp/examinee/voices/20200518/4471/ 映像教材 「アフリカの女性と子ども展示メディアの制作」人間文化研究機構「学術知デジタルライブラリの構築 X-DiPLAS」と共同し、教材スライドコンテンツを制作。聖心女子大学4号館1階、展示・ワークショップスペース「BE*hive」にて公開。</p>

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------